

●花房尚作 (曾於市在住)

1970年代に玉野井芳郎が「地域主義」を提唱し、鶴見和子が「内発的发展論」を展開した。それらは地域の特性に焦点を置いた概念である。

その概念は中央集権構造を持つ日本には馴染まなかったようである。

都心の都合に合わない特性は、ゆがみとか、ひずみとか、おくれとして処理されるか、あるいは見落とされてしまう。

巷では世界都市「TOKYO」が喧伝され、東京都がまるで日本そのものであるかのような報道がされている。地方分権の議論は長年にわたって積み重ねられているが、議論のみで終わっている。

国民から集めた税金をどの領域、どの地域、どの階層に、どのような基準で配分し、利害関係者の間でどう調整し、どう合意を得るかという駆け引きが政治である。利害関係者の力関係を鑑みて最も妥当な落としどころを選択している。

それは、自分に利益をもたらしてくれるのがよい政策であり、自分に損をさせるのが悪い政策である。私たちは自分勝手な都合で物事を考えている。自分に都合のよい者の評価は高くなるし、都合が悪い者の評価は低くなりがちだ。

これによって既得権益を持つ者たちにとって都合のよい構造がつくられる。マスメディアなどを使って変化を徹底的に批判し、前例踏襲が無難という結論に導いている。よくある事例として、表向きは意見を求めているが、内実は前例踏襲で決まっている。たとえ公募案件であったとしても、なんとなく公募して、なんとなく審査をして、なんとなく前例踏襲で落ち着いている。

このような前例踏襲で儲けを得るのは既得権益を持つ者たちである。

変化のない状態が続くと意見をしていても何も変わらないという意識を持つ。考えるだけ無駄なので、誰かに任せて放っておくようになる。そのような状態が60年以上にわたって続いているのが過疎地域である。

過疎地域をよりよい方向に変えたいと考えている者もいる。地方交付税や補助金に頼らない地域づくりを考えている者もいる。ところが、過疎地域には地方交付税や補助金の恩恵で暮らしている者が多くいる。その者たちが既得権益を囲い込んで地域の在り方を決めている。不特定多数の誰かが地域の在り方を変えられる構造になっていない。

地域を変えたいと考えている者もその構造をわかっている。その構造をわかっているからこそ「若者が地元を去るのは仕方がない」といった発言につながっていた。

おそらく、というか、間違いなく、一定の分野や属性に補助金を配るような政策手法は、競争や変化を嫌う過疎地域では効果がない。その補助金が既得権益となって地域の競争意識や変化を阻害している。

過疎地域のように経済規模と人口規模が小さい地域では、全ての住民に税金の恩恵を与える政策手法の方が効果的である。まずは、既得権益を排除して公平性のある補



助金の分配方法に改める。地方分権を進めて住民が地域の在り方を決められるよう改める。自分たちで地域の在り方を決められるという意識を持つことで様々なアイデアが湧いてくる。

政府は一定の分野や属性に補助金を配って支持率を上げる手法を改めてはどうだろう。日本社会の限界が問われている現在において、国家の仕組みそのものをつくり変える時期に来ているのではないか。

日本は昭和から平成を経て、令和に移り変わっている。昭和の常識と令和の常識は違う。昨年と今年でも常識は違う。私たちの生活様式は常に変化している。時代に合わせて統治構造や地域構造を変える必要がある。

ところが、管理者は構造を変えることなく、管理される側の意識を変えようとする。耳あたりのよい言葉を使って意識の改善を促そうと試みる。ところが、個人が持つ思考の在り方を他者が変えるのはほぼ不可能

である。個人の持つ意識はそう簡単には変わらない。構造を変えることでしか意識は変わらない。私たちは人材を入れ替えることでしか変化を促せない。

たとえば、組織や地域の指導者を高齢者から若者に入れ替えるだけで日本の風通しはよくなる。若づくりしている高齢者から元気のある若者に入れ替えるだけで過疎地域の雰囲気も明るくなる。高齢者が組織や地域の指導者を担わなくても他にやれる若者は幾らでもいる。若者に託すことは変化につながる。

そこをお願いしたい。

高齢者は指導的な立場から身を引いて、その席を若者に譲ってもらえないだろうか。激しい競争の中でようやく手に入れた席を渡したくないという気持ちはわかる。席を譲るとやる事がなくなるという気持ちもわかる。積み重ねてきた知識と経験があるという自負もわかる。それでもあえて、その席を若者に譲る気概をみせてもらえないだろうか。

過疎地域の人びとはそのままよい。都心の人びともそのままよい。今ある日常を変えなくてもよい。指導的な立場にいる人材を入れ替えるだけで統治構造が変わる。統治機構が変わることで過疎地域の地域構造も変わる。もうそろそろ、「自分たちで引き受けて考える地域」の構築を目指してはどうだろう。

2023年冬吉日 花房尚作



花房尚作 (はなふさ・しょうさく)

放送大学大学院修士課程修了、人類学修士。米国での2年間の就労を経て、海外40カ国、180都市を周遊。専門は、田舎(過疎地域)の研究と、価値観の多様性の研究。大隅半島の現実を伝えた著書「田舎はいやらしい(光文社新書)」で注目を浴びる。連絡先: info@sho39.com